

皿にべちやべちやと盛られたものを
毒と分かつて尚匙で掬い
噛みつく様に、丸呑む様に
喉が拒否しても涙が塩味を足すものだから
歯に挟まった苦味を引きちぎって口に放り込む
給仕は愛情たっぷり眼差しを向ける
席を立てば金になるのだ、さぞ愛しかろう
そう、だったら、どれほど良かったか
頭上のシャンデリアの照り返し
三ツ星を掲げる看板のなんと輝かしいことか
毒が回る
感覚は麻痺し、口角が引き攣る
死んだ目の前に次の皿がやってくる
残したら？ 溜まった負債を残しては逝けない
ましてや私が殺したものの肉
どうせ払える金も無し、人生の味を楽しみましょう
毒が完全に回りきるまでは